

2022 年度業務実績報告書

提出日 2023 年 1 月 18 日

1. 職名・氏名 教授 今井 朋実

2. 学位 学位 修士、専門分野 社会福祉学、授与機関 カンザス大学
授与年 平成 10 年 5 月

3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習

① 担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等

現代福祉問題論 (2 単位) 1 年次、ソーシャルワーク演習 1 (1 単位) 1 年次、ソーシャルワーク論Ⅲ (4 単位) 2 年次、ソーシャルワーク論Ⅳ (4 単位) 2 年次 (新カリキュラム移行ため今年度はなし)、精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅰ (1 単位) 3 年次、精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅱ (1 単位) 4 年次、社会福祉演習 (2 単位) 3 年次、卒業研究 (4 単位) 4 年次、社会福祉援助特論 (個別) (2 単位) 大学院 1 年次

② 内容・ねらい

講義・演習への取り組みについては、着任後 6 年目であり、これまでの取り組みを振り返りながら取り組んだ。昨年度から開始された社会福祉士養成教育の新カリキュラムへの移行のため、担当年度が変更になった科目があったため、昨年度同様、引き続き調整しながらの年度となった。

現代福祉問題論：1 年生に対する教員の紹介を兼ねた講義科目であるため、ソーシャルワークとは何か、について基本的な概念の理解を念頭に講義を行った。

ソーシャルワーク演習 1：昨年度からの新カリキュラム移行に伴い、1 年次の授業 (ソーシャルワーク演習 1) を担当しているが、欠席が目立ち、これまでとは異なる学生の状況への対応が余儀なくされた。学生の演習中の会話を聞くと、元々は社会福祉の専攻希望ではないなど、モチベーションが持てない学生も見受けられ、入門演習などの担任の教員との連携の必要性を痛感する経験であった。初めて社会福祉の概念に遭遇する学生を対象に、これまで 2 年生を対象として展開してきたソーシャルワーク演習 1 を 1 年生に対して分かり易く展開する工夫が必要であった。合わせて、引き続きコロナ禍ということもあり、学生のコミュニケーションの機会が必然的に失われているままの状況の中、授業ではありつつも、演習科目による学生のコミュニケーション促進の役割は大きいものであると実感した。また、昨年と同様に感じたこととしては、ソーシャルワークの理論を理解してそれを踏まえて演習の中で深めていくことから、理論と演習は対であり、また表裏一体であると想定される。したがって、ソーシャルワークの基本理念・理論をある程度理解したうえでソーシャルワーク演習 1 が導入されることが望ましいと改めて思った。1 年生に演習 1 を導入した新カリキュラムの意義について、社会福祉の概念とはなんぞやと、まだ理解をし始めたばかりの 1 年生を対象とした新カリキュラムの導入がかなり乱暴であるとの印象を未だ持ちつつ授業に昨年度は取り組んだが、今年度は演習といえどもその背景にある理論をやはり説明してから、演習を行うことに意義があると再認識したため、意識して取り組んだ。これら以外には、これまで同様、前学年時 (1 年時) に学生 (2 年生) がどの程度の学習効果を積み上げたかを過去の 5 年間の経験を参考に、工夫した。学生の講義・演習への取り組みの傾向は福井県立大学に着任して 6 年目を迎えることから、慣れたところで慢心せず、これまでの経験を振り返り、学生の該当科目への興味関心などが理解できたと実感できた 1 年であった。

ソーシャルワーク論Ⅲ：ソーシャルワーク論Ⅲでは 30 名の学生の講義科目である。前年度同様学生が押さえておくべきケースワークの方法論、グループワークの歴史及び方法論について講義を展開した。

精神保健ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ：2 名の 4 年生における実習指導を行った。精神保健ソーシャルワーク実習では、福井県立病院、福井大学医学部附属病院での病院実習と、地域活動

支援センターやすらぎ、宿泊型自立訓練施設やわらぎでの地域実習での実習指導を行った。今年度は、対面の実習巡回が実施できた。

社会福祉演習（ゼミ）：学生はスマートフォンで授業を受けるのが辛いなどとの訴えやまたはパソコンをもって大学で遠隔対応に参加していても、周りに人がいる環境では演習型の授業では発言がし難いなどの訴えがあり、講義形態の場合、未だ無理と考えているが、ハイブリッド形式は小さな演習でも困難な場面もあった。また、前の授業が対面授業の場合、次の授業を遠隔授業にするという連携については依然課題であった。対面授業の直後の遠隔授業や遠隔授業の直後の対面授業など、教員に依って授業形態の選択が異なる場合があるため、学生の希望に応じて対応することが時に工夫を要する場面があった。YouTube やビデオなどの視聴覚教材を屈指し、より頻繁なりアクションペーパーやレポートによって学生への講義を深めることができることが昨年に引き続き学ぶことができた。直接顔が見えるコミュニケーションよりも学生の深い洞察を知り、理解できることもあることを昨年度同様実感した。新しいネットワークの方法が大学として検討されているようだが、学生により理解が進むことを期待したい。

卒業研究（4年生）：引き続きコロナ禍であり、特に卒業研究は、遠隔授業と合わせたハイブリッドへの対応の工夫が必要となる場面もあった。4年生は精神保健福祉士の資格を取らない場合、4年生の授業が卒業研究のみとなることが往々にしてある。県外から来ている学生は、アパートを引き払い、実家に戻り卒業研究や就職活動をしている学生もいる。システムには随分と慣れ、Google Classroom 及び ZOOM を駆使した講義や演習の提供方法は短い時間でスピード感を持って遂行できるようになったが、時々大学の PC を使用すると、ネットワークにうまく繋がらない場面があったので、遠隔の講義形態でも、対面の講義形態でも、学生の状況に応じて臨機応変に対応できるよう常にシステムの変更についていけるように備えておきたいと思った。

社会福祉援助特論（個別）：大学院科目の社会福祉援助特論（個別）については、北米の修士課程で一般的に使用される D.H. Hepworth の” Direct Social Work Practice ” の訳本を用意して、5名の修士課程の受講生(1名は履修済みであるが、再度聴講)を対象として講義を行い、ディスカッションを行った。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

現代福祉問題論：入学してからまだ1か月の新生生に対する講義のため、ソーシャルワークについて分かり易く伝えることを心掛けた。

ソーシャルワーク演習1：学生の興味及び学習意欲は年度により異なるため、30名（演習の学生は半分の15名×2回の授業）を対象として、授業開始時期の学生の様子を観察することやリアクションペーパーにより学生の興味関心を知ることによって前年の授業案を修正して授業を展開した。演習科目のソーシャルワーク演習1については、2年次に学習予定のソーシャルワークⅢと連動させて、ソーシャルワークⅢで扱う内容についてソーシャルワーク演習1を対応させて概念を先に1年生で学ぶ機会を持って貰った。1年生の新カリキュラムでは先に概念を学ばずして、演習1が始まるため、2年生で学ぶことが想定されている内容について補足しながら、授業を展開した。学生にとって難解とも感じられる理論と応用（演習）を連動させることが理想ではないかと思っている。2年生には、対応レベルの異なる事例をグループワークで行って貰い、事例を沢山積み重ねて考えて貰うことで、社会福祉実践の実際の考え方を涵養する機会を持って貰った。昨年にも増して学生が応用力に耐えうる能力を有していると実感したため、2年生においても、より高度な事例にあたって貰い、経験してもらうことも可能であることが分かったので、来年度に参考にしたいと考えている。

ソーシャルワーク論Ⅲ：ソーシャルワーク論Ⅲでは、ケースワークの方法論及びグループワークの歴史及び方法論について講義を展開した。講義科目ではあるが、2時限続きの授業であるため、アクティブラーニングの手法を用いて、1時限には講義、2時限には視聴覚教材やグループディスカッションの手法を対面授業で実施した。

ソーシャルワーク論Ⅲは30名の講義科目であるが、昨年度と同様に180分という2時限続きの講義科目のため、教育効果や学生の集中力に課題があるものと考えられた。特に引き続きコロナ禍のため、過度な学生への講義時間の負担を回避するべきとの認識のもと、前半90分は講義とし、後半はディスカッションを実施した。そのあと、リアクションペーパーの時間を設けた。ソーシャルワーク論Ⅲは講義科目であるが2時限目に視聴覚教材の視聴やグループディス

カッションなどのアクティブラーニングの手法を取り入れた。このような形式にすることによって、教育効果や集中力の課題について、学生には理解が深まるものとなり、時間を有効に使うことができた。4年前に、ソーシャルワーク養成校協会連盟のアクティブラーニングの研修会に参加させて頂く機会を得たため、これを今年度も活かすことができた。今年度もさらに着目されているアクティブラーニングの手法を取り入れて授業構成を工夫した。

精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱ：担当して4年目である。引き続きその担当の経験を積み重ねていきたい。今年度は2名を担当した。1名の学生が実習途中でパニックのような状態になったため、対応に苦慮したが、現場指導者との協働により、無事学生は病院実習、地域実習ともに実習を終えることができた。

社会福祉演習（ゼミ）：ゼミ担当の学生1名から合理的配慮の申請がなされたため、社会福祉士の実習を10月から実施するにあたって、サポートチームに入った。実習が順調に行っているほかのゼミ学生との交流に難色を示したため、実習中断中の10月には、個別で定期的にゼミを開催し、サポートをした。

卒業研究（前期・後期4年生）：石川県白山市にある社会福祉法人佛子園は、地域住民と福祉施設が融合した天然温泉施設、スポーツクラブ、ビール醸造、食堂、花屋、珈琲焙煎・販売・カフェ、内科クリニックを抱える障害者継続支援B型施設を始めとする社会福祉の複合施設である。地域共生型複合福祉施設として施設を位置付け、それを運営する寺院を母体である。佛子園にゼミの学生7名を引率し、見学実習を実施した。佛子園は学生ボランティア、インターシップ、就職で社会福祉学科の学生の受け入れ実績のある施設である。統括担当と連携しながら、学生に豊かな経験を積んで貰えたのではないかと考えている。

卒業研究（4年生）は7名担当した。卒業研究では、卒業論文作成と仕上げの指導と、4年生の就職活動と日頃の生活が円滑に行われているかをモニターする役割がある。7名の就職先は、病院2名、精神科病院1名、障害者複合施設1名、高齢者・障害者複合施設1名、高齢者施設1名、一般企業1名である。

今年度の学生の卒業論文のテーマは、①「加害者家族の先行研究から考える～当事者にどのような心境の変化が生じ、また直面する問題があるのか」、②「シングリズムとは何であるのか～苦しむ人を少なくするためには～」、③「尊厳ある人生の最期を迎えるために～安楽死・尊厳死をめぐる問題から～」④「大学におけるLGBTQ+学生への支援」、⑤「転居高齢者のその方らしい生活を実現するには」、⑥「毒親の定義と親子双方の回復」、⑦「認知症カフェの現状と課題から考えるよりよいあり方」であった。前期から後期にかけて夏休みを除き、卒業研究の隔週ゼミを実施し、各自纏めてきた進捗内容を、プロジェクターでスクリーンに映し出し、発表して貰い、映し出された資料をお互いに観ながらディスカッションを進めて行くことで、学生の論点がクリアになり、また相互学習を促進することにもなり、卒業研究を仕上げるにあたって、相互に学びながら進めることができたのではないかと考えられる。7名は平均すると規定の15枚を超えた20頁以上を執筆し、中には35頁、41頁の学生もいた。7名がいきなり締め切りの12月上旬間近に添削を願い出てくると、対応できないため、章ごとに区切り、順番に10月ぐらいから執筆を開始して貰い、少しずつ添削をして行った。また、卒業研究発表会に向けた資料も別途作成するため、こちらについても添削の対応をした。最後には、卒業論文発表会に臨むにあたって、学会発表さながらに、リハーサルを実施し、準備をした。

社会福祉援助特論（個別）：修士課程の学生の中に、希望や要望についてのメールや質問の頻度が高い学生がおり、できるだけ慎重に、丁寧に返信に応じて対応することを心掛けた。また、資料についても、送信漏れがないように慎重に毎回の授業前に送付し、送信後は確認した。

(2)その他の教育活動

内容

男子アイスホッケー一部顧問（令和元年4月～現在に至る）

4. 研究業績

(1)研究業績の公表	
① 著書	
	【0本】
② 学術論文（査読あり） 現在査読、修正中（掲載予定）。 「若年性認知症の人とその家族を対象としたデイサービス・デイケアに関する先行研究の検討と課題」社会環境論及第15号、社会環境学会、2023年3月発行予定 今井朋実（単著）	
	【1本】
③ その他論文（査読なし）	
	【0本】
④ 学会発表等	
(1) 学会発表：「若年性認知症のためのデイサービス・デイケアの支援の構成要素の重要性の一考察」単、今井朋実、第22回大会人間福祉学会、研究・実践発表 2022年12月18日、於中部学院大学	
(2) 第1分科会座長：第22回大会人間福祉学会、研究・実践発表 2022年12月18日、於中部学院大学	
	【2件】
⑤ その他の公表実績	
	【0本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績	
令和4年度学内研究費（ステップアップ研究支援）	
(3)特許等取得	
(4)学会活動等	
社会環境学会 理事	

5. 地域・社会貢献活動

<p>①社会福祉法人 福井県社会福祉協議会 福祉サービス第三者評価決定委員会（高齢者福祉施設分野小委員会）（令和2年4月～現在に至る）</p> <p>②静岡県福祉サービス第三者評価評価調査者（平成18年から現在に至る）</p> <p>③東京都保健所（新宿東口検査・相談室）相談員（平成15年から現在に至る）</p>

6. 大学運営への参画

<p>(1)補職</p>
<p>(2)委員会・チーム活動</p> <p>大学院カリキュラム検討チーム活動（社会福祉専攻）（令和元年4月～現在に至る）</p> <p>大学院教務担当（社会福祉学科）（令和元年4月～現在に至る）</p> <p>大学院入試広報検討チーム活動（看護福祉学部）（令和4年4月～現在に至る）</p>
<p>(3)学内行事への参加</p> <p>公開講座：大学院研究セミナー（大学院入試受験希望者募集のための広報活動）のサブコーディネーター担当（令和4年11月12日実施）</p>
<p>(4)その他、自発的活動など</p> <p>大聖寺高校入試説明会（説明会での看護福祉学部のプレゼンテーション）</p>